白山ふるさと文学賞

第十二回　白山市ジュニア文芸賞　受賞作品

【島清部門】

小学生1・2年　小説の部　最優秀賞

「たぶんかみさまのグミ」

東明小学校一年

前川（まえかわ）　友良（ともよし）

ぼくは、たなかけんたろう。たなかまちにすんでいるしょうがく一ねんせい。すきなたべものはグミ。三じのおやつは、まいにちグミ。おみせには、いろんなグミがうっているから、たべくらべをしている。かたいグミにやわらかいグミ、あまいグミにすっぱいグミ、ハートのグミにほそながーいグミ、サッカーのボールみたいなグミにちきゅうみたいなグミ。グミはほんとうにおいしくて、たべたらうれしいきもちになる、ぼくにとってはたいせつなもの。

ある日、ぼくががっこうからかえってくるとちゅう、おかあさんがかわでつりをしていた。ゆうごはんのしゃけをつっていた。おかあさんは、

「おかえり。かえったらすぐにしゅくだいをしなさいよ。」

といった。

ぼくはうちにかえってきた。しゅくだいをやれといわれたけど、めんどうくさいからやらなかった。

「しゅくだいなんてくそじじい、べんきょうなんてばか、きらい、なくなればいい！」

ぼくは、こころのなかでいった。

するととつぜん、つくえのうえにぼくのだいすきなコーラグミがふってきた。まわりにはだれもいない。

ぼくは、そのグミをあるきたべしながら、

「かみさま、ぼくのいちばんすきなコーラグミをありがとう〜♪」

とうたいながら二かいにいった。すると、ぼくのへやにおいてあったランドセルが、とつぜんまどからすっとんでいった。そして、おかあさんがつりをしていたかわにポッチャーンとおちた。そして、そのままながれていった。

おかあさんはびっくりして、ランドセルをつりざおでつろうとしたけど、ランドセルはそのまま　ながれていった。

おかあさんがかえってくると、おこったこえでいった。

「こら、けんたろう。なにランドセルなげてんの！」

とおかあさんはおこった。

「いや、なげてないよ。かってにとんでいったんだよ。」

ぼくは、ほんとうのことをいったけど、おかあさんはしんじてくれなかった。

「あんた、うそでしょ！」

「いや、ほんとうのほんとうやもん。」

でも、おかあさんは、まったくしんじてくれなかった。だって、ぼくはいつもうそついているから…。

つぎのあさめがさめたら、いつもどおりのあさだった。あさごはんはきのうののこりのしゃけだった。おとうさんがやいてくれて、たべたらとてもおいしかった。

でも、がっこうにいくとき、なぜかぼくだけじゃなくてみんなランドセルをかついでいなかった。がっこうのじぶんのきょうしつにいくと、いつもだったら、きのうのしゅくだいのおなおしがあるけど、きょうはなかった。一ねんから六ねんまで、みんなそうだった。しゅくだいがなかった。

ぼくは、しゅくだいがなくなったのがわかって、

「やったー。」

とよろこんだ。そして、グラウンドにはしっていって、おもいっきりあそんだ。

「しゅくだいがないなんてうれしいよ。さいこう！」

と、ジャングルジムのてっぺんでさけんだ。すると、おともだちが、

「しゅくだいってなあに？」

ときいてきた。ぼくは、どうこたえていいかわからなくて、こまってしまった。そのおともだちは、ほかのこにもきいた。でも、みんなこ

たえられなかった。

きょうしつにもどっても、いつまでたっても一げんめがはじまらなかった。じゅぎょうがなかった。きゅうしょくのじかんまで、みんなそとやたいいくかんへいって、ドッジボールをしたり、はしりまわったりすきなことをしていた。

きゅうしょくをたべながら、ぼくはおもった。

「しゅくだいもべんきょうも、めんどうくさいからないっていいなぁ。ずっとこんなせいかつがいいなぁ。」

がっこうがおわって、よりみちをしてうちにかえってきた。かえりみちはランドセルがないから

「あ〜、かるいなぁ♪」

とうたいながらかえった。おうちにつくと、おかあさんに

「けんたろう、あんたかえりおそいでしょう！」

とおこられた。あのにじゅうにせいきからきた、あおいロボットのいえのこどもみたいにおこられた。

それでママといっしょにスーパーへいった。おかあさんは、きのうまではねだんをきにしていたのに、きょうはほしいものをぽんぽんカゴにほうりこんでいた。レジのひとはおかねがわからなくてこまっていた。レジのうしろのぎょうれつが、どんどんのびてきた。かいものにいっただけなのに、すごくつかれた。

かえりみち、ぼくはあるくのがめんどいなとおもった。いつもはくるまでいっていたのに、きょうだけあるいてだったからだ。よくかんがえると、あさからくるまをいちだいもみてないなぁ。

「なんでやろ〜なんでやろ〜ななななんでやろ〜♪」

といきなりうたいだしたら、おかあさんにわらわれた。

二しゅうかんくらいがすぎた。

ぼくはほんをよむのがすきだったのに、ずっとよんでいなかったことにきがついた。そして、がっこうのとしょしつにいったけど、あったばしょがたいいくかんになっていた。

「としょしつはどこだ〜!?」

とさけんだ。するとまわりにいた六ねんせいが

「としょしつってなに？」

ときいた。ぼくは、

「ほんがいっぱいならんでいて、かりられるところだよ。」

とこたえた。六ねんせいは、

「ほんってなに？」

といった。ぼくはこまっちゃって、こたえられなくなってしまった。

ほんがよめなくなって、ぼくはさらにこまってしまった。だって、だいすきな「キャベたまたんてい」シリーズがもうよめなくなって、めちゃくちゃなみだがでてきた。ぼくは

「うえぇぇぇん。」

とさけびながらないた。

それからぼくはずっとかんがえていた。きゅうしょくのときも、あそぶときも、おてあらいのときも。

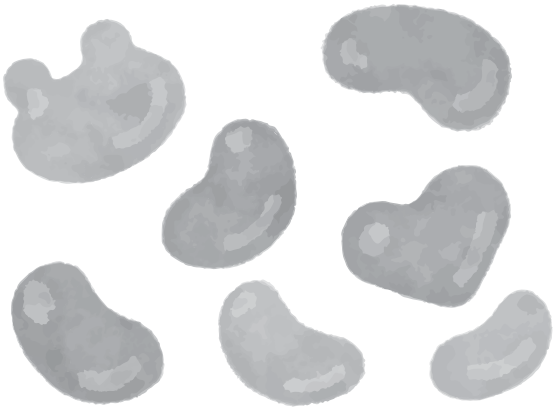
かえりに、どうろをあるいていてこたえがでた。

「やっぱりべんきょうも、しゅくだいもたいせつなものなんだ！」

ぼくは、ちいさなこえでいった。

すると、がっこうのせいふくのズボンになにかがとんできた。てをつっこむと、ソーダグミがはいっていた。それをあけてまわりのこにばれないように、こっそりたべた。するととつぜん、ぼくのこんいろのかっこいいランドセルが、ぼくのまえにおちた。ぼくはそれをかつ

いだ。なぜかうれしいきもちがちょっとずつわいてきた。

うちにかえって、ランドセルをかついだまま、ぼくは
「ただいま。あぁ、つかれた。おかあさん、カレーたべたい。」
といった。するとおかあさんが
「おかえり、しゅくだいがおわったらくるまにのりなさい。カレーこをかいにいくよ。」
といった。
ぼくは
「はーい、わかった。」
といって二かいへいって、へやにはいるとすぐにしゅくだいをはじめた。

スーパーにいくくるまのなかで、ぼくはいつものようにグミのあじでまよっていた。だいすきなコーラグミかソーダグミにしようとおもった。
でも、しばらくなやんで、ぼくはどっちもやめてイチゴグミにきめた。だって、またせかいがかわったらいやだもん。